HELL ON EARTH

ザッピー浅野

＊

あまりお見舞いに行ったことがない。お見舞いに来てもらったことはもっとない。しかしお見舞なる行為が意味のあることなのはよくわかる。病気になると、気が滅入って精神的にも弱くなる。身も心も弱っているとき、人は他人の情けを受けると嬉しいものだ。お見舞いに来てもらうことにより、少なくとも精神的ダメージはある程度緩和される。精神面が回復に向えば、肉体的な回復も早まることは道理が合う。

入院してどれくらい経つだろう。数日、あるいは数ヶ月。はたまた数年。ひょっとしたら数十年。僕はこのベッドに横たわり、たまに院内を散歩し、医師の診察を受け、トイレに行き、手術の日を待っている。数十年てこたないか。鏡を見ても、僕はまだ三十代の若さに見える。三十代の半ばまではまがいなりにもまともな社会生活を送っていた。数十年入院生活を送っていたら、僕は今、四十代以上のオッサンでなければならない。とにかくそう錯覚を起こすくらい、いつ入院したのか覚えてないくらい、長きに渡って僕はこの病院に閉じ込められているのだ。理由は恐らく、誰もお見舞いに来てくれないからだ。お見舞いに来てくれないから、僕はなかなか回復しないのだ。

病室はとてつもなく広く、共同部屋だ。各ベッドはカーテンに仕切られ、同じ部屋なのに、どんなやつが入院しているのか未だに知らない。たまにカーテンの向こうで声はするが、患者同士のコミュニケーションの薄いのがこの病院の慣習らしく、僕はこの病院で他の患者と一度も話したこともなければ、実は見たこともなかった。せめてカーテンを開け放しておけばよいと思うだろうが、カーテンを開けていても誰も通らず、誰の声もしないので、仕方なくカーテンを閉める。カーテンを閉めると、誰かが歩く音や、看護婦と患者が言葉を交わす声が聞こえてくるので、カーテンを閉め切っていた方がなぜか寂しさが紛れるのだ。カーテンのすぐ向こうで人影がゆらゆらしていても、カーテンを開けた瞬間、それは霧のようにかき消えてしまうことは解っていた。観測することにより、観測者が観測対象に影響を与えることは物理学でも証明されているのだから、それは特に不思議なことでもない。

＊

初めてお見舞いに来てくれたのは石神さんだった。綿密に言うと彼女もこの病院に入院していたので、正確にはお見舞いと呼べないが、先に論出した「お見舞い」の機能から考えて、それはお見舞いと呼ぶに足るものだった。つまりは僕は彼女の登場によって、精神的にとても癒されたのだ。

「ヤッパリ。吉岡だと思った」

石神さんは昔から僕を親しみを込め名字で呼び捨てにする。彼女は鼠色のジャージを着、片手に点滴を引きずっていた。

「晴美ちゃん？」

「なによ、晴美ちゃんだなんて呼ばないで」

ふざけて名前をチャン付けで呼んだ僕を優しく叱りながら、石神さんは椅子に座る。石神さんは昔から元気な人で、おはじきが口の中ではじけるようなしゃべり方は以前のままだ。しかしそれを発する肉体は、ボリュームと光源だけメモリをあげた古いテレビを見ているように、どこか病んでみえた。

「うひゃあ。何年ぶりかね」と僕は指を折る。「じゅう…にさんねんぶり？」

石神さんは僕が二十代前半、新卒で入社した会社の上司だった。学生に毛の生えたばかりの僕にとって、年上の彼女は頼もしい先輩だった。彼女もその時まだ入社して半年くらいだったが、広告代理店という業界は概して出世が早く、既に主任の肩書きを持っていた。何事にも前向きで頑張りやの姿勢が認められ、入社半年で管理職に昇格したわけだが、彼女自身広告の営業は経験したことのない業種で、会社では自分のことだけで精一杯だったに違いなく、特に僕が目をかけてもらったとか、教えてもらったということはない。ただ憧れの先輩そして上司として、最初は少し離れた所からその働く姿を見つめていたにすぎない。そして僕が入社して三ヶ月くらい経ち、仕事にも慣れてきた頃、僕らの距離は急激に縮まり、親しくなった。その後、半年ほどして彼女は病気になり、会社を辞めた。僕もその頃には主任になり、仕事もますます多忙を極め、彼女と連絡を取ることもなくなった。

「12年。そのくらいかな。本当にひさしぶりだネー。それにしても同じトコに入院してるとは思わなかったわ。ビックリしたよ。ちょっと前から廊下でチラチラ見かけてて、どこかで見たことあるなとか思ってたんだけど、ア

ッと思って。吉岡じゃないかとか思って、もしかしてと思って病室の名札を見てみたら。やっぱ吉岡じゃん、みたいな」
「そうなんだ。あの頃のこと、思い出すね」
僕は広告代理店での日々を思い出していた。小さな会社だったが、活気があり、とにかく仕事はいっぱいあった。また飲みが多く、ほぼ毎晩近所の居酒屋に連れて行かれては、朝まで社長や幹部連中に付き合わされた。残業をしていて夜十時くらいになると、社長が立ち上がり「さあ。みんな疲れただろう。めしでも食うか」と宣言する。みんな本当は食事をする暇も削って仕事を終わらせ、一刻も早く家に帰りたかったのだろうが、社長のその宣言の前には腹をくくるしかなく、みんな諦め机の上を片付け、その後の朝まで続くであろう飲み会の準備を始めるのだった。
「いろいろあったわねえ」
石神さんは点滴の残りを気にしながら言った。彼女は何を思い出しているのだろうか。とにかく変わった会社だったから、思い出すネタにはつきないだろう。ただ中小企業というのはどの会社も多かれ少なかれどこか変わっているものだと思う。僕もその広告代理店を二年半で退社してからいろいろ会社を替わったが、どこも「うちの会社はちょっと変わってるから」というのがそこの先輩からの定番文句だったような気がする。
「で、吉岡はいつから入院してるの？」
「それが、よく覚えてない」
「覚えてない？　自分のことなのに」
「まったく、自分のことなのにね。自分のことじゃないみたいだ。何の病気なのか、いつまで入院してるのか、いつ手術をして、いつ退院できるのか、ぜんぜん知らないし、わからない。まあ結構長いよ。石神さんは？」
「手術もあるんだ。……わたしももうずいぶんになるなあ。あそこを退社してすぐだから、やっぱり12年くらい？　それにしても相変わらずね、吉岡」
石神さんは僕のおでこを小突いた。「自分の病名とか、手術や退院の日程くらいハッキリしときなさい。診察は毎日あるんでしょ？　病名とか教えてくれないの？　だいたい診察って何するのよ」
「う～ん…」僕はしばし考えた。「よくわからない」
石神さんは頭を振る。

「そんな、毎日診察受けてるのにワカラナイって、何なのよ」
「聞いてないんだな。とにかく命に関わる病気ではないと思う。もっとほら、中耳炎とか、盲腸とか、重くても扁桃腺とか、その類いの」
本当に何も知らないのだった。あまり自分の病気に興味がないのだ。いつ退院して、ここを出られるのかは、気になってはいた。今度診察のとき先生に改めて聞いてみよう。
「ヘンなの。まあいいや、今度また教えて。じゃ、もうすぐ点滴終わるから」そう言って、石神さんは立ち上がった。「わたしの病室は5階だからね。いつでも遊びに来て」
石神さんは点滴をひきずり、立ち去ろうとした。そういえば今日こうして石神さんと話す迄、主治医とたまにやってくる妻以外で人と話したのはいつだったろう。入院して以来初めてかもしれない。そう考えると、妙な寂しさを覚えた。
石神さんは窓のある方角をちらっと見て、僕の方を振り向き、
「今日はイイ天気よ」
とひとこと言って、そのまま見えなくなった。
いい天気。
青い空。
白い雲。
僕はがばとベッドから起き上がり、スリッパを履いてカーテンの外に出、石神さんが見たように窓の方角を見てみた。
そこにはどこまでもどこまでも、果てしなくカーテンが続いているだけで、窓なんかどこにも見当たらなかった。
僕のベッドは病室の入口近くにあり、そしてこの病室はとてつもなく奥に広く、入り組んで、迷路のようになっており、窓はあまりにも遠く、障害物に遮られ、見えなかった。でもこの向こうに恐らく窓はあるはずだった。
無性に外の景色が見たかった。
僕はここに入院して以来、一度も空を見てないのだ。

＊

病室を出入りする時、無限に続くかと思われるカーテンの羅列が目に入ると、気が遠くなる想いがする。

先日のことだが、無数のカーテンをかきわけ、窓まで行こうと挑戦してみたことがあった。それは空を見たい、外の空気を吸いたいというよりは、カーテンの向こうには何があるのかという、どちらかというと漠然とした好奇心からだった。

僕はカーテンをめくり、また現れるカーテンをまためくっては、どんどん奥(そと)に向って進んでいった。しかしどこまでもカーテンの白い宇宙が続くのみ。進むにつれ、カーテンの密度はだんだん濃くなり、次第にヒラヒラ目前を流れるカーテンが、患者のベッドを覆うものなのか、僕を迷わせるものなのかわからなくなってきた。

これらの白い布はいったい、何を覆うものなのか。はたまた僕は今、白い布の内側にいるのか外側にいるのか。果たしてこれらは僕を外界から遮断する幾重にも張り巡らされた結界なのか。患者と患者を仕切る白い布は、いつのまにか僕と外界を区切る外壁と化している。

仮にこれらがもとどおり、患者の入院圏を定める境界線だとして、これだけのカーテンにくくられた膨大な数いるであろう患者たちはどこに存在するのか。

時おりぼそぼそ話し声や、サイド・テーブルに備えられたテレビの音量や、薬の袋をかさかさ鳴らす音は聞こえてくる。しかしそれはあくまでもカーテンの向こう側での出来事であって、カーテンをめくると、その時点で僕はカーテンの外側の世界に転じてしまうようだった。

僕は気持悪くなり、吐き気をもよおしそろそろ戻ろうと、最後の一枚と決めたカーテンをめくると、そこには半分にカットされた巨大な果物のようなものが横たわっていた。

それは人間の女性を正確にふたつに割ったものだった。

よくみるとそれは、高校の同級生の二俣貴理子さんだった。

＊

貴理子さんはその名に相応しく、その全体をまっぷたつに、股のちょうど割れ目にそって裂けた亀裂はへそを通り、クルミのように割られた脳天まで、人体をシンメトリーに左右に分断していた。それが彼女の死体であるという事実に気づいたのは、かなり時がたってからだった。それは死んでいるという事実を通り越し、カーテンの海に呑まれていた僕の吐き気を忘れさせるほど美術的に、まるで人間だったものから別の完成品に再構築されたかのようなまとまりを保っていた。およそ石川五右衛門が斬鉄剣で鮮やかに人間を頭からカラタチ割りに切り捨てた以外にこのような、死体というには美しすぎる肉のかたまりに昇華されることは不可能なのではないかと思えるほど、それは理路整然と人間であることに終止符が打たれていた。このふたつの肉のかたまりを天秤にかけたら、寸分の狂いもなく釣り合うに違いない。それは生前の如何なる姿よりも美しい彼女の最期だった。

ふたつにわかたれた人体の断面から、斬られた瞬間から数秒後にゆっくりとこぼれ落ちたとおぼしき美しい内臓と脳漿が、とろりと床に流れ出ている。刺身で食えそうなそれらの新鮮な具を、床一面を覆う透き通るように美しい血のソースが美味しそうに浮かべていた。

それは象徴的な意味でなく、死体を超越していた。首を鮮やかに斬っても、その頭部はコンマ数秒から数秒にかけて、意識があると言う。つまり瞬時に殺された人間は、殺された瞬間から死体になるまで僅かにタイムラグがあるのだ。彼女の死は、その殺戮の刹那から生命の糸が切れ、物理的な死体となる前に、死体以外のオブジェになった。まだ左脳がその痛みを言語にし、右脳が自らの死を正当化する前に、ふたつに分かれた脳は連絡をとりあうことなく、発生した電気信号を静かに細胞の海に沈めていったに違いない。僕はこれを死体と呼ぶことを永遠に認めることはないだろう。「死」を経験することなく生命を終了した者の、「死」を象徴するオブジェ、と表現するしかない。

僕は彼女のふたつになった顔を頭の中でひとつに合わせてみた。とても幸せそうな安らかな笑顔をしているように見えたが、実際に合わせてみたら微妙に想像とは違うかもしれない。少なくともその表情に死の痛みはなく、あらゆる苦痛の意識から解き放たれているように見えた。そんなことを想像しながら僕は、いったい誰が何の為に彼女をこんな目に合わせたのか、という疑問に至るのをすっかり忘れていた。

＊

貴理子さんの死のオブジェ発見直後、院内は一時騒然となったが、やがて元通りになった。騒然と言っても、それはあくまでもカーテンを閉め切っていたときのカーテンの向こうでの騒ぎであって、カーテンを開ければそこはいつもの静かな院内の風景だった。騒ぎが収まった今では、カーテンの向こうは相変わらず看護婦と患者の話し声や、スリッパが床をこする音が聞こえてくるのみ。当たり前の風景がくりかえされ、僕はその前後にあったゴタゴタをすべて忘れた。あたかもそれは最初からなかったかのごとく。

そのかわり、生前の貴理子さんとの高校時代を思い出すことが多くなった。彼女と高校入学で同じクラスになり、それから高校を卒業するまで、彼女は僕の視界にちらちらいた。思い出と言っても、何度かクラスや廊下ですれ違ったり、目が合ったりしただけだ。

僕は学生時代、友達がおらず、誰かと旅行や遊びに出掛けたことがまったくない。ただ授業中に眠り、ひとりで昼食を食い、放課後はまっすぐ帰り、テレビを見、本を読み、夕食を食べ、ビデオを見、週末はひとりで映画に行き、図書館に行き、その隙間はひたすら妄想にあけくれ、高校三年間、ひたすらそれらを延々と繰り返して生きぬいたような気がする。何の変化もなく、発展もなく、発達もせず、進歩もなく、周期のみがあった。

僕の高校時代の生命レベルは限りなくゼロだった。もちろん心臓は動いていたし、呼吸もしていたから物理的に僕は生きていた。しかし人間が人間らしく生きる意味での生命活動を数値化するならば、限りなく僕はゼロだった。いわゆる植物人間と高校時代の僕とでは、活動の範囲が広いか狭いかの差があるだけで、レベルは変わらなかったのだ。そんな僕のゼロ数値を辛うじて1か2くらいにあげていた要素が、貴理子さんだったような気がする。彼女と僕はなんでもない。友達でもなかったし、もちろん恋人でもなかった。ただ彼女が僕の視界に入った瞬間だけ、僕の精神に何らかしらの影響を与え、僕の生命活動に唯一の不確定要素をもたらしたというだけのこと。その要素の根源はもちろん僕の彼女に対する特殊な感情であり、その感情は恋心でも憎しみでも同情でもなく、しかしそのどれもが微妙なバランスで少しずつ入

り交じった微妙なものだった。
貴理子さんの「死」は、社会に出て数値が１００かそれ近くまで上がった僕の、最初の「1」の消滅であり、起源の消失だった。それは同時に、帰結を探し求める旅の始まりでもあった。

＊

そんなことをつらつら考えていたら、僕の境界のカーテンが開き、女が現れた。妻の淳子だった。その姿が目に入ると、僕の心臓は通常以上の早さで脈打ち出した。そういえば今日、彼女は来る予定だった。彼女の来訪をその瞬間まで忘れていたのは、彼女の存在自体が忘れたいものの象徴と化していたからに他ならない。そして脈打つ鼓動は、心に蓄積された彼女と僕との思い出の重さだった。
前回、淳子が見舞いに来たのはいつだったか。彼女の見舞いの頻度は最近まちまちになってきており、前回の記憶、さらに前前回の記憶は深い井戸の底に落ちてゆく産毛に手を伸ばすが如き頼りなさで頭に残されているのみだった。そして僅かに指先でつまんだ一本の産毛は、「わたし、もう決めたから」という妻がまさにこの場で言い残したひとつの言の葉だった。
「純ちゃん」
「淳ちゃん。来たか」
僕は名前を純一郎という。漢字は違うが、われわれ夫婦はお互いを同じ言葉で呼び合っていた。
僕は貴理子さんのことを話そうかと思って、やめた。妻とはウマが合わず、口を開けば喧嘩がはじまる。ましてや女性の話しは幾らわれわれが赤の他人になろうとしているこの時期でも、いかがなものかと思う。
われわれの夫婦生活は4年ほどになるが、最初から仲はあまりよくなかった。じゃなんで結婚したのかと問われたら返す言葉もないが、とにかくわれわれ夫婦は相性が悪く、仲が悪く、それは最初からふたりとも自覚があり、それを知りながらあえて、結婚という道を選んだのだった。妻という存在は、僕の人間関係を人体だとすると、肌に出来た腫れ物のようなもので、平常の肉体に不自然に突起し、切り取りたくても切り取れず、押すと痛い。そんな

感じなのだ。人ごとのようだが、僕らの歩んできた道を振り返ると、人間は情に引きずられ誤った選択をしてしまう生き物なのだということをしみじみ思う。いや骨身にしみて感じる。今はまだ人ごとではないのだ。われわれはまだ戸籍上は夫婦という鎖で繋がれている。しかしその鎖も、まもなく外されようとしている。そして代わってバツイチという烙印が押されようとしている。「わたし、もう決めたから」と前回彼女は確かにそう言った。予告通り、彼女はそっと離婚届をバッグから出した。

彼女の名前と判は押してあった。その顔は微笑んでいた。彼女はいつも不機嫌そうだった。たまに突発的に笑う時はあるが、持続的に微笑むことはほとんどなかった。だから彼女の微笑みは彼女をいつもと違う印象に変えていた。僕は初めて、彼女がお見舞いに来てくれたような気がした。これまで便宜上「お見舞い」と呼んできた彼女の来訪は、ここで初めてお見舞いとしての機能を果たしたのだ。

離婚を切り出したのは彼女だった。しかし言わせたのは僕である。僕は夫婦生活の後半、彼女の不機嫌そうな顔を見るのが嫌で、彼女と喧嘩するのが嫌で、ほとんど家に帰らなくなっていた。彼女は寂しさのあまり、犬を飼っていた。シンという名のヨークシャテリアだった。犬が好きな僕は、週に一度は家に帰り、シンと遊んだ。シンは僕が生涯で二番目に飼った犬だった。そして淳子も僕が生涯二番目に付き合った女性だった。シンは彼女が連れて行くのだろう。そして僕は彼女ともシンとも一生会うことはないのだろう。

「シンは元気？」

腫れ物に触るように話す僕に、いつものような苛立ちを覚えることなく、彼女は「元気よ」と答えた。「時々実家に連れてくんだけどね。お父さんが離さないの」

その言葉で、僕は淳子の父のことを思い出した。良い義父様（おとうさん）だった。彼女を大事にしていた。僕は彼女を大事に出来なかった。僕が大事に出来ない以上、最初の持ち主に返すしかない。もっと大事にしてくれる人が見つかるまで。

「じゃあね。そろそろ行くわ」

淳子が立ち上がる。「あなたが退院した頃には、もうあたしは家にはいないからね。シンも連れてくね」

その言葉を最後に、彼女は僕の前から永遠に姿を消した。

＊

暇なのでノートパソコンを立ち上げ、僕のホームページに設置したチャットに入室する。

暇な時、誰かと語り合いたい時、チャットは便利なツールである。入院中なんぞは欠かせない。

暫くすると小春さんがやってきた。小春さんは一年くらい前に僕のサイトを見てメールをくれてから、たまにチャットで話しをしている、二十六歳、神奈川県在住、北海道出身、趣味は読書とドライブ、身長168cm、好みのタイプは真面目な人、な女性である。入院してから話す頻度は高くなった。会ったことはまだない。

小春＞　こんにちは^　入院生活はどう？（03/12-14:32:48）

吉岡＞　どうもこうも、退屈ですよ。小春さん、お見舞いに来て下さいよ（03/12-14:32:48）

小春＞　うふふ。いきなり行って驚かせちゃおうかな。私、病院の雰囲気って好きよ。相変わらず食事はカレーばかり？（03/12-14:32:48）

吉岡＞　そう。この病院はどういう方針か、食事はカレーばかりなんですよね。まあカレー好きだからいいんですけど（03/12-14:32:48）

小春＞　吉岡さん、カレー好きなんだ。私もカレー好きだけど、カレーばかりじゃなくて、私のこともちょっとは振り向いてほしいわ（03/12-14:32:48）

吉岡＞　だからこうしていつも待機して待ってるじゃないですか（03/12-14:32:48）

小春＞　本当に私を待ってくれてるの？（03/12-14:32:48）

吉岡＞　だって他にいつもチャットしてる人なんていませんし。退院したら散歩でもしましょうね（03/12-14:32:48）

小春＞　退院できるのかな。もうずいぶん長いよね（03/12-14:32:48）

吉岡＞　まったく毎日退屈退屈で、おまけにさびしくて、死にそうですよ（03/12-14:32:48）

小春＞でも奥さんがたまに来てくれるんじゃない？（03/12-14:32:48）
吉岡＞いやー、あまり来ないですね（03/12-14:32:48）
小春＞嘘（03/12-14:32:48）
吉岡＞本当ですよ（03/12-14:32:48）
小春＞だって、昨日だって来たじゃない（03/12-14:32:48）
吉岡＞え。なんでわかるんですか？（03/12-14:32:48）
小春＞だって見えるもん（03/12-14:32:48）
吉岡＞み、見えるって…（03/12-14:32:48）
小春＞みえるみえる♪（03/12-14:32:48）
吉岡＞どうやって？　まさか小春さん、霊感でも!?（03/12-14:32:48）
小春＞とにかく見えるのよ（03/12-14:32:48）
吉岡＞よくわかりませんが。確かに妻が来ましたよ、昨日。ついに離婚届に判を押したんです。もう会うこともないでしょう（03/12-14:32:48）
小春＞そうなんだ。とりあえずおめでとう（笑）　これで晴れて自由の身ね（03/12-14:32:48）
吉岡＞しかし小春さんにはかなわないですねえ。いやはや、するどいっていうか（03/12-14:32:48）
小春＞それほどでもないわよ。たまたま当たっただけ(03/12-14:32:48）
吉岡＞チャットではかなりしっかりしてるようにみえますけど？（03/12-14:32:48）
小春＞それはきっとチャットだからじゃない。ネットで知り合った人と実際に会ったりすると、結構違うものよね（03/12-14:32:48）
吉岡＞それはあるかもですね。よく考えたら、今までオフ会に行って、ネットの印象そのままだった人って、あまりいなかったような気がします（03/12-14:32:48）
小春＞だとしたら、チャットのわたしと、リアルのわたし、どっちが本当のわたしなんだろうね。やっぱり今のあなたにとっては、チャットのわたしが本当のわたしになるのかな（03/12-14:32:48）
吉岡＞まあ小春さんは小春さんですって。どちらも本当の小春さんです（03/12-14:32:48）

小春＞　じゃあさ、あなたはどうなの？　今わたしと話してるあなたは本当のあなた？（03/12-14:32:48）
吉岡＞　もちろん。僕は僕ですよ（03/12-14:32:48）
小春＞　それならいいんだけど。だって、会ったらぜんぜんイメージと違うって、結構戸惑うものだしー（笑）（03/12-14:32:48）

その後、われわれの会話は貴理子さんの話しや石神さんの話しなど、最近の院内での僕の人間関係の話題に及び、二時間後に僕がウンコをしたくなり、診察の時間を装って回線を切る迄ずっと続いた。彼女は石神さんの存在に嫉妬し、貴理子の存在に興味を持った。

小春さんと僕は、最近バーチャルの恋人同士のような関係になっていた。いつのまにか、僕は小春さんとの未来を夢想するようになっていた。顔も見たことがないのに。

＊

僕はウンコをするため、トイレに向って病院の暗い階段を降りていた。トイレは地下二階にある。なのでわざわざ長い階段を降りていかねばならない。「地下二階」という言い方はある意味単なる目安で、多少は上下すると思う。まあだいたいその辺りということだ。つまり地下へ降りてゆく階段があまりにもざっくばらんなため、正確に地下何階なのか判断が難しいのである。

トイレへの階段は、一般的な階段の常識を根本から逸脱していた。僕たち入院患者は深夜以外ロビーには降りられず、二階のトイレ直通階段から降りてゆく。非常に歩き難く、それでも最初は何とか階段の様相を呈しているが、地上階を通過する当たりから凸凹（でこぼこ）と、階段はざっくばらんな凹凸（おうとつ）と化してゆき、天井も壁も同じように、脈打つようなシェイプに変化してゆく。次第に暗くなり、歩き難さは増し、壁に手をあて、自分をささえながら、一歩一歩足下を探りつつ、前に進んでゆく。壁はぬめぬめと湿り気をおび、柔らかく弾力性を伴いはじめ、僕は少しずつ気が遠くなってゆく。

人類にとって、排便がいかなる意味を持つ行為なのか。僕は長いトイレへの通路を歩くたび、しみじみ考える。

その点、この階段は象徴的なある種の答えを提示してくれた。
まるでトイレに降りる行為そのものが脱糞行為の一貫で、僕は糞になり、自ら長い排水口を降りてゆくところなのではないかとしばし錯覚をおこした。その妄想をするたびに僕は吐き気をもよおした。実存主義。人間は皆、巨大な便器でもがき苦しむ糞であり、やがては流されてしまう運命にあると言ったのは詩人のブコウスキーだったっけ。
しかしそんなフッと魔物のようによぎる妄想は別として、僕はこのトイレに至る経路がまんざら嫌いでもない。
地獄の底に降りてゆくような病院の深部は、その印象に反して、底知れぬ開放感が漂っている。奥でありながら、空のような。下でありながら、上であるような。無でありながら、無限であるような。そんな自由な闇に満ちた場所。
それがこの病院のトイレであり、僕の排泄なのである。
僕はウンコをしながら、貴理子さんのことを考えた。小春さんは貴理子さんに興味を持ち、貴理子さんことを調べてみると言っていた。ひょっとしたら小春さんが貴理子さんの死の謎を解明してくれるかもしれない。
僕はウンコにまみれながら、全身が貴理子さんへの想いにつつまれるのを感じていた。

＊

ある日、石神さんが死んだ。長年の闘病生活の果ての、安らかな最期だった。十数年前、彼女が言ったことをふと思い出した。「わたし、占いで短命だって言われたの」と。占いのせいか、彼女の生は本当に短く終わった。まだ四十代だった。
ちなみに僕は占いという学問を完全に信じているわけじゃないが、それでも何度か観てもらったことがあり、ある占い師は八十四歳まで生きると言い、またある占い師は九十五歳で死ぬと言い、またある占い師は「もっと生きるでしょう」と言っていた。占いが統計学だとすると、統計学の統計学的に、僕が長生きする事実は確かに思えた。
そう、占いは統計学なのだ。

すると石神さんが占い師に短命だと言われた後、他の複数の占い師に観てもらい、長生きだと鑑定する占い師が短命だと言った占い師の数を越えた場合、彼女はいま死なずに済んだかもしれない。プロセスと結果は入れ子である以上、これは理論的に正しい。この理論を否定するなら、占いそのものの信憑性はもはや形を成さない。

僕は僕で、退院したら八十四歳まで生きるのか、九十五歳で死ぬのか、それ以上生きるのかはっきりさせねばならぬ。

石神さんの死は、死への不安を僕に強く自覚させた。僕の根源に触れた貴理子さんの超越的な「死」には一抹も感じられなかった、現実に根を下ろした死への感覚だった。なぜなら、石神さんは僕が生まれて初めて現実に付き合った女性だったのだ。

石神さんはずっと前、子供の頃が人生で一番幸せだったと言っていた。残念ながら、僕は子供の頃の思い出がない。なんでも母に言わせると、友達の少ない、いつもひとりで寡黙に本を読んだりテレビを見ているだけの、他者との交流を一切しない子供だったらしい。それでは僕が貴理子さんと初めて出逢った頃と同じである。僕は子供の頃から高校くらいまで、何も変わらなかったのだ。

この頃妙に過去を振り返る。それだけ歳をとったのかもしれない。単に過去の思い出の人たちとの遭遇と、過去との決別が同時に身にふりかかり、そんな精神状態になっているだけかもしれない。少なくとも入院というシチュエーションは、人生から切り取られた時間である。入院生活はそれまで走ってきた道の途中で立ち止まり、後ろを振り返る機会を与えてくれる。これは積み重ねてゆく年月の重要な階層のひとつにもなるかもしれないが、同時に老いへのステップでもあり、それまでの勢いを残し、再び同じスピードで走り続けたいと足掻く自分もいる。人間、一度立ち止まってしまったら、また走り出す時、果たして同じスピードで走れるものなのだろうか。過去を振り返ることは、その後の走りの速度をどう変えるのだろうか。

度重なる死との出会いと、足下にまとわりついてくる不安からか、僕はその夜、おかしな夢を見た。食事の夢だった。

人間の女性をちょうど縦に半分にしたような皿に、赤黄色い料理が盛りつけられている。料理はドロドロとしたペースト状のものに、肉が浮かべら

れ、スプーンですくうとその下にはご飯があった。僕はひとくち口に入れると、またスプーンでひとくちすくい、口に押し込んだ。スパイスのよく効いたインド風味のカレーで、うまかった。

カレーに浮かんでいる具が貴理子さんの肉だと気づいたのは、人体の皿の顔の部分がぞわりと動き、目を開いて僕に向って微笑んだ時だった。

目を覚ました僕は、ベッドの上に吐いた。胃液だけが布団に垂れ流れ、口内に残った酸い苦い液体をちり紙に吐き出すと、布団を軽くふいて、また眠った。またおかしな夢を見てしまうかもしれないという恐怖はなく、すぐに眠れたが、なにはともあれその後も何度も同じような夢を見て、うなされた。

＊

診察の時間を知らせる院内放送が鳴り響き、僕は一階の外来ロビーまで赴いた。主治医である小笠原ハル子先生の表札を掲げた診察室の前に座り、名前が呼ばれるのを待つ。ロビーに僕以外の患者はなく、外界につながる玄関にはシャッターが閉まっていた。

「吉岡純一郎さん」

名前が呼ばれ、診察室に入る。ハル子先生はカルテをめくりながら「どうですか、調子は」と聞く。「最近、ヘンな夢ばかり観るんです」と僕は答える。自分の病名がなんだか知らない以上、調子を聞かれてもそんな答えしか出来ない。これで膵臓の病気だとかわかっていれば最近ちょっとランゲルハンス島の労働力が低下しているようですとか具体的な言い様はあるのだが。

「あら。どんな？」とハル子先生はカルテから目を離し、乗ってきた。僕は貴理子さん風味のカレーライスの悪夢について淡々と語った。ハル子先生はまるい瞳をこぼれるように光らせて、僕の言葉にいちいちうなづいた。話しは悪夢の説明から、いつのまにか高校時代の貴理子さんとの思い出へと移っていった。

「その貴理子さんって子のこと、あなたは好きだったの？」

「いや……好きってゆうか、その、彼女はほら、なんてゆうか、ちょっと変わった子っていうか、どこにでもいる普通の、変わった子だったんです。あ。いいや、変わっているけど、普通に生きていたというべきでしょうか」

「意味わかんないんだけど」
「僕にちょっと似ているところがあったんですけど、でも、ぜんぜん違って。僕は彼女の一部分が羨ましいような、でもその一部分以外のすべてに同情していたような、それでいてその羨ましい一部分は何よりも僕が切望する、自分に欠けている部分だったような、それでいてそれが具体的に何なのかはまったく解らない、そんな感じでした」
「ますますわかんないわ。つまり、あこがれみたいなもの？」
僕は少し考えて、「あこがれかどうかはわからないんですが、彼女がキラキラ輝いて見えたのは確かでした」と答えた。このキラキラ、というキーワードは僕にとって、とても深い意味がある。つまり僕にとって女の子とは、二十代に入り石神さんと出逢うまで、遠くでキラキラ輝いている存在でしかなかったのだ。
「ふうん…つまり、彼女は現実味のない存在だった。しかし一部で同じ現実を共有している、そんな感じ？」
「ああ。まさにそうなのかもしれません」僕は深く頷いた。ふと、僕の心に希望の光が灯った。「先生、僕があんな悪夢を見るってことは、ひょっとして、僕は退院が近いんでしょうか？」
「なんでそういう憶測になるの？」
「いや……なんとなくですけど」
ハル子先生はうふふと笑い、「まあ、当たるとも遠からずだけど」とカルテを覗き込んだ。カルテには何も書かれておらず、いつものように白紙だった。「その前に、手術が待ってるわよ」
手術。僕はなぜ手術をするのか。もう何度も繰り返したその質問は、鍵をなくした宝石箱のように、胸の奥に仕舞ってある。だってそれを何度聞いても、ハル子先生の答えはわけのわからないひとことで片付けられてしまうからだ。
〝それは、あなたが悪いのよ〟
自分なりにこの言葉を解釈してみるに、病気と性格は気の流れとかそういう部分で密接に関係していると言われる、あれのことじゃないだろうか。
例えば肝臓が悪い人は短気でプライドが高い。
心臓が悪い人は冷酷で傲慢。

肺が悪い人は心配性で泣き虫でわからず屋。
胃が悪い人はワガママですぐ落ち込む。
性格が病気に現れるのだという。すると僕はなんだろう。高校の頃は人間関係に悩み精神的にいつもくよくよしていただけに胃炎で悩んでいたことがあったが、社会に出て性格が前向きになるにつれ、胃も丈夫になってきた。残る僕がかかえた問題といえば、物臭くらいのものだろうか。具体的に教えてくれたら早いのだろうが、あくまでも自分で気がつけと、ハル子先生は言いたいのだろう。
自分の悪い部分。穴の空いた部分。足りない部分。欠けた部分。腐った部分。痛い部分。臭い部分。凹んだ部分。凸(つぼく)んだ部分。腫れた部分。血が出る部分。膿んだ部分。痒い部分。それらは全部同じところではないが、だいたい同じ部分に集中し、他の部分も悪い気を放ち、中心に向ってひとつの病気を形成する源流となっている。その源流がいわゆる悪循環として僕の身体を蝕んでいる。この連鎖を断ち切る術は、病の中枢を支配する源泉から根絶するしかない。
人間の本質はその肉体か魂か、人によって考えは異なるが、ハル子先生はきっと後者なのだろう。だから病原体の根絶はとどのつまり、僕が自分で気がつかねばならぬのだ。ただ病気を生物学的に治すだけでは、僕の病気は再びぶりかえし、体内に今と同じような悪しき気の流れを形成してしまうのだ。
「実は手術は明日ですからね。寝坊しないように」
診察室を出ようとする僕の背中に浴びせられたそのひとことは、どこか寂しそうに響き、僕は振り向いてハル子先生の顔を見たが、やっぱりその顔はどこか寂しそうに微笑んでいた。
退院しても、また会いたいです。
その言葉をぐっと呑み込んで、僕は診察室を後にした。

＊

その夜はなかなか眠れなかった。眠る気など最初からなかった。眠れないことも解っていたし、眠るべきでないとも思った。僕は考えなければいけない。自分の病気の正体を。手術の前に、魂で気がつかなければいけない。気

がつかなければ、手術は無駄になってしまう。いつか僕はまた同じ病気になる。
僕はノートパソコンを立ち上げ、チャットにログインした。何かヒントが欲しかった。ヒントなど要らないのかもしれないが、いくら考えても答えは出ず、気ばかり焦った。明日が手術に決まったのは、その時が来たからだ。つまり僕は既に気がつく材料がすべて与えられているということだ。ならばこれ以上のヒントは不要であろう。
でも僕はわからない。自分の病気が何なのか。
深夜を過ぎた頃、小春さんがログインした。

小春＞　あいうえお（03/12-14:32:48）
吉岡＞　小春さん！（03/12-14:32:48）
小春＞　元気？（03/12-14:32:48）
吉岡＞　まあまあです。それより、明日ついに手術ですよ。明日ってゆうか、もう今日ですけど（03/12-14:32:48）
小春＞　よかったじゃない。いよいよねー。これでやっとおわりね。覚悟はいいかが？（03/12-14:32:48）
吉岡＞　それが…。手術当日だっていうのに、未だに僕は何の病気か、わからないんです（03/12-14:32:48）
小春＞　先生に聞けばいいんじゃないの、そんなこと？（03/12-14:32:48）
吉岡＞　それが。教えてくれないんです。いや、それはいいんです。人に教えてもらったら、僕は手術してもどうせまた同じ病気になる。自分で気づかないとダメなんです。しかも手術までに。僕にはもう時間がないんです（03/12-14:32:48）
小春＞　なんでそういう結論になるの？（03/12-14:32:48）
吉岡＞　僕の病気は、身体だけの問題じゃないからです。これは僕の魂の問題なんです。深いところで、本当に病んでいるのは僕の魂そのものなんです（03/12-14:32:48）
小春＞　ふうん。まあ、解釈はややズレてるような気がするけど、アプローチそのものはある意味、的を得ているかもね（03/12-14:32:48）
吉岡＞　小春さんにわかるんですか？　てゆうか、小春さんは答えを知ってるんですか？（03/12-14:32:48）

小春＞知ってるわよ、もちろん（03/12-14:32:48）
吉岡＞なんで？　いや…そんなことはもうこの際どうでもいいです。知っているなら、何かヒントを下さい。ああ。もう時間がない（03/12-14:32:48）
小春＞じゃ、こうしましょ。その病院が人間だとするわね。壁は骨。階段は内臓。廊下は血管。そしてカーテンは筋肉。つまりあなたはひとつの巨大な人体の内部にある一塊の細胞のようなものだと思ってみては？（03/12-14:32:48）
吉岡＞はあ…。それが一体どんな？（03/12-14:32:48）
小春＞つまり、視点が間違ってるのよ、あなたは。人体は宇宙なのよ。細胞もまた宇宙なの。宇宙全体の中で、あなたの占める位置付けというものを考えてみるわけ。すると、答えが見えてくるんじゃないかしら（03/12-14:32:48）
吉岡＞つまり、この病院の中の悪い部分を探せば、おのずと僕の中の悪い部分も判明する…ってことですか？（03/12-14:32:48）
小春＞まあ、そういうことかしら。それより、話しは変わるけど。いや、ちょっと関係あるかもだけど、例の二俣貴理子さんのことね（03/12-14:32:48）
吉岡＞ああ。はいはい。そういえば頼んでましたっけ、彼女の調査を（03/12-14:32:48）
小春＞うん。あのね、調べてみたんだけど、あなたの高校のクラスメートに二俣貴理子なんて生徒はいないわよ（03/12-14:32:48）
吉岡＞はあ？　そんなバカな（03/12-14:32:48）
小春＞本当よ。調べるまでもなかったわ。よく考えたらあなたの高校って、男子校だったじゃない。奥さんの淳子さんと石神さん、このふたりは実在の人物ね、間違いなく（03/12-14:32:48）
吉岡＞・・・・・・・・・・（03/12-14:32:48）

そうだった。
僕のいた高校は男子校だった。
ならば、貴理子さんの思い出は、なんだったのだろう。

僕は小春さんに更なるヒントを求めて次の言葉を打ち込もうとキーボードに指を走らせると、画面に「そろそろ寝るから落ちるわ」と小春さんの発言が先に現れた。僕は書きかけた発言をデリートし、「ちょっと待って下さい。まだ話したいことが」と打ちかけると、また画面には彼女の「だめ…もう眠くて限界」と書き込みがあり、続いて「明日は大事な手術があるの。寝とかないと失敗しちゃう。あ。言ってなかったわね。わたし、女医やってるの。じゃあね」という発言を最後に、『小春さんが退出しました』と表示された。

小春さん…。小春さん？　女医さん？　え？

僕はそのまま、パソコンの画面を永遠に見つめ続けるかのように、見つめ続けながら、まとまることのない考えをまとめようと、頭の中で脳をちぎってはすり鉢に入れ、すりこぎですりつぶし、指先で口に含み吟味していた。

パソコンの画面に、再び小春さんの名前が現れることはなかった。もうすぐ明るくなる頃だった。

僕はスリッパを履き、ベッドを離れ、カーテンの外に出て、病室の奥を向いて立ち尽くす。手には懐中電灯を持っていた。明かりをつけると、幾千枚ものカーテンの海が広がった。

僕は再び、カーテンをかき分け、歩きはじめた。

この向こうに何があるか、確かめたかった。貴理子さんの死を発見した場所からその先、まだ足を踏み入れていないその先の領域に、何があったのか。

結局人生とは、後悔しないことが第一である。すべてを失っても後悔しなければ万事オーケーだし、すべてを手にしてもそこに一抹の後悔があれば、人生は失敗なのだ。

このカーテンの向こうを知ることは、俺に新たな後悔を思い出させることになるだろうか。カーテンの向こうを知らずに一生を終えること自体が、ひとつの後悔になるだろうか。どちらが正しい結論かはわからないが、少なくともすべてを知ってから判断を下したい。僕はそういう性格に違いなかった。

僕は貴理子さんを発見したあたりまでやってきた。かつてこのカーテンの向こうに貴理子さんの「死」があった。

カーテンをめくる。

何もない。

床にうっすら赤く、人型のシミがついている。ここから先だ。
僕はカーテンをめくった。
そこには、コンクリートの壁が立ちふさがっていた。
僕は壁に額を打ち付け、そのまま地面まで額を削るように跪き、そのまま
そこで、眠った。

＊

手術の時間です、の言葉に目を覚ましからだを起こすと、いつのまにか僕はベッドに寝ていて、時計の針は午後二時三十二分を指していた。ベッドの前には、ハル子先生が立っていた。ハル子先生はうふふと笑っていそうな唇を光らせ、僕をみつめ、ささ、早く、と言いながら、病室の入口に運び込まれた移動用ベッドに僕をうながした。「もう時間がないの。手術時間まであといくらもないわ」
僕は何も考えられない重い頭をかかえてベッドを離れ、移動用ベッドにからだを横たえた。何も考えられないのじゃなくて、もう考えても仕方がないというか、ようするに、僕は負けたのだ。人生に。結局、答えは出なかった。僕の病根も、手術の目的も、わからないまま、まもなく僕は手術台に寝かされ、からだを切り刻まれようとしている。いったいからだのどこを切られ、どこから血が出て、どこを取り除かれ、どこを縫い合わされると言うのだろう。きっと取り除かれることになる病根は、カーテンの向こうに立ちふさがった壁を前にした僕自身のように、一歩も前に進めなかった精神によって、再びこのからだに根を下ろす日がくるのだろう。ならば手術なんてしない方がいいのではないか。答えが出てから、手術をしてもらえばいいのではないか。
「先生。ハル子先生」
「なによ？」
ガラガラと、移動用ベッドを押しながら、ハル子先生が聞き返す。
「僕は、まだ手術をしない方がいいんじゃないですか」
「なんでそう思うの？」
「だって、僕はまだ、なんで自分が手術をするのか。僕のからだのどこが悪いのか、答えが出ていないんです」

「それは仕方がないわよ。もう諦めなさい。なに、ちょっと痛いだけよ。すぐ終わるわ」
「でも…」
「デモもカカシもないのね。それに大丈夫。あなたは答えは出せなかったけど、それは必ずしも出さなくちゃいけない答えってわけでもないんだな、これが」
「そ、そうなんですか？」
「うん。うっすら気づいていたかもしれないけど、この病院で流れる時間はいわゆる永遠なの。永遠にタイムリミットがあるって、おかしいでしょ？」
「おか…しいですね、確かに」
確かにこの病院での日々は、それは永遠とも形容せられるべき単調さと空虚さに満ちていた。ちなみに「永遠」はふたつの意味がある。永遠のごとく一瞬だけ光り輝く刹那的な衝動と、ただだらだら続く宇宙空間のごとき時空の惰性的継続性。先生の言う、この病院をして形容される永遠とは後者のことだろう。いや、前者かな。まあいいや。
「つまり、万事オッケーってことですか？」
「オッケーよ、もちろん。だから手術の時がきたんじゃない。まあ、気がついていた方が良かったことは確かだけど、でも、必ずしも気がつかなくちゃダメだったってことはないわ」
「僕は…治るんですか、完全に？」
そこでハル子先生はきゃはは♪と音符マークつきの能天気な笑いを巻き起こした。
「まーだそんなこと言ってるのね」
「あれ…先生、ちょっと」
僕は異変に気がついた。ガラガラと進むベッドは、暗いトンネルの奥へと進み、下へ下へとさがってゆく。
「先生…この方向は」
あれ？
ハル子先生がいない。
ベッドだけが、ガラガラと、僕を運んでゆく。
僕はひとりになって考えた。

この方向は、トイレじゃないか。
なんで、トイレに向っているのだろう。
トイレで手術を行なうとでもいうのだろうか。それとも、トイレの隣の部屋とかが、手術室なのだろうか。
ガラガラ。ガラガラ。
ベッドは進むよどこまでも
粘膜のトンネル抜けて、穴越えて
遥かなトイレの地獄まで
僕の手術をつないでる

＊

果たして、そこはやはりいつものトイレだった。
手術の前にウンコをして、お腹を空にしておけとでも言うのだろうか。
とすると、腸の手術か何かだろうか。ひょっとして、ハル子先生はもう一度考える暇を与えてくれたのかもしれない。これは何かのヒントに違いない。
そうだ。ウンコをしながらものを考えると、よくいい考えが浮かぶことがある。
僕はパンツをおろし、ついでにシャツも脱ぎ、全裸になって、便器に飛び込んだ。
——さあ、手術を始めましょうね。
どこからともなく、ハル子先生の声が聞こえてきた。

＊

——本当に大きいですよねえ。
ハル子先生の声が聞こえた。大伽藍に反響するような声だった。

見上げると、巨人のハル子先生がメスを持ち、小人の僕を見下ろしていた。そして僕はいつのまにか、満開の菊の花の上に立っていた。

――ええ。高校の頃から育ててきましたから。

山の向こうから、男性の声も響いて来る。それは僕の声のようで、僕の声ではなかった。

――吉岡さぁん、あなたの痔って、おもしろいのよ。イボ痔のくせに、自分のことをあなた自身だと思ってるみたい。

――へぇー。先生はイボ痔の気持ちもわかるんですか。さすが名医ですね。

――痔にも魂が宿るのよ。長く育てるとね。ほら、人形だって古くなると髪が伸びたりするじゃない。

――高校の頃から二十年くらいのつきあいですからね。イボ痔だけじゃなくて、たまに切れ痔にもなりましたよ。ぱっくり切れて、ウンコのときは便器が血の海になったこともありました。

――切れ痔の方はひと足先に薬で治療したから、今度はこの子の番よね。

そう言って、ハル子先生は僕の方を向き直り、いつもの声で、話しかけた。

――ごめんね。イボ痔さん。切れ痔さんもあなたを呼んでるわよきっと。どうか一緒に成仏してね。

ハル子先生の手に光るギロチンのようなメスがゆっくり僕に近づいてきた。

――いや、今まで吉岡さんをさんざん苦しめてきたから、地獄行きかな。

――先生、愛してます。退院しても、また会いたいです。

僕と同じ声の、僕の本物の発する声が、遠くからやまびこの様に聞こえた。
どこかで聞いたことのある言葉だったが、その意味はよくわからなかった。

結局気がついても気がつかなくても、同じだったのだろうか。
僕はどっちみち、切り取られる運命だったというのだろうか。
気がついたら、その時点で僕の自我は消滅してたのだろうか。
気がついてたら、僕は痛い思いをしなくてすんだのだろうか。

ハル子先生は真顔になり、
僕を頭から菊の花弁まで、
まっぷたつに切り裂いた。

＊

了